「こもれび」

私は遠い山の大きな森で生まれて150年になります。森ではいろいろな木の仲間がいたのですが、ほとんど言葉を交すことはありませんでした。鬱蒼とした森はいつも暗く陽をみることはありません。ほんのたまに繁った葉から洩れる、こもれびがあしもとにゆれているのを見ると、嬉しくなりました。

季節は何度目かの秋が去き、冬が訪れたある寒い朝、突然、冷いチェーンソーが私のからだの枝を落し、幹を截り、村の木工場に運んで、幅ひろで分厚い板にしてしまいました。そして、遠くはなれた町の郊外にある、広場(プラザ)にすえられ、気がつくと私はテーブルになっていたのです。

私のすんでいた森にくらべたらそれはそれは、とてもちいさなスペースでした。時々近所の小人たちが何人か集って私の背中のテーブルに料理をのせ飲みものを流しこみながら、小声で話したり大きな声で笑ったりしています。

興にのれば歌いだすこともあります。そのテーブルの持主はあでやかな微笑をうかべ、いつもやさしいもてなしに小人たちは楽しい気分になってしまいます。

この広場には淹れたてのコーヒーや日本茶を出す店があるのですが、その味は魔法でも使っているのではないかと思えるほどの美味さです。

よくできたことに、近くにはおいしいできたてのパンとドーナッツを売る店がならんでいます。

又、集りに出る小人たちの化粧や髪をととのえる店、目のわるい老小人たちのためのメガネやさんもあったのです。

そしておいしい料理を食べられるように健康な白い歯を守る歯の見張り番までいました。小人たちがメタボにならないように、とてもよく効く薬の専門店が広場(プラザ)の広場(ひろば)側にありました。

そうそうまだあった、広場の西の出口には、なんと、私と小人たちの楽しい思い出を残してくれる年老いた写真やさんがいて、ふいるむで写す四型の写真様を首からぶらさげて待っていたのです。

私はいつしか自分の育ったあの大きな森を思い出すことがなくなりました。

この広場が、こよなく好きになってしまったためです。

それというのも、あの森ではたまにしか見られなかったこもれびが、いつも見られるからではないかと思えるのです。

光代